小説フレームアームズ・ガール
第7話「新たなる翼」

1. 急転

『アーキテクト・オラトリオの、ボッコボコ人生相談室！！』

じゃんじゃかじゃんじゃかじゃんじゃんじゃん♪でんでんででんでんでんででん♪

『さあいよいよ今週から始まりました新コーナーです。元グランザム帝国軍のアーキテクト・オラトリオ大尉に、その大尉としての豊富な人生経験を下に、ゲストの方の人生相談をして頂きます。オラトリオ大尉、どうぞよろしくお願いします。』
『はい、よろしくお願いします。』

なんか昼のお笑い番組に、スーツ姿にネクタイを締めたアーキテクトが出演していた。
その様子をシオンとスティレットが昼食を食べながら、食堂の大型テレビで他の兵士や職員たちと一緒に眺めている。
エミリアが言うには、これもコーネリア共和国の絶対中立、差別根絶の『象徴』としての仕事の一環なのだそうで、シオンやスティレットに先立って既にアーキテクトたちに働いて貰っているのだそうだ。
かつて他国の軍人だった亡命者が、こういった自国のバラエティ番組に出演する姿を全世界に晒す事で、コーネリア共和国が差別行為を一切しないというアピールに繋がるとの事らしい。
実はこのコーナーの前に流れた、世界中で売れている有名化粧水のCMにも、轟雷と迅雷が出演していたりするのだが。

『それでは最初の相談者は、この方です！！エミリア様の専属秘書を務めていらっしゃる、マテリア・アーカイブさんです！！』
『は、はい、アキトさん、よろしくお願いします。』

スタッフに促されて壇上に現れたマテリアが、アーキテクトに深々とお辞儀をした。
椅子に座ったマテリアはアーキテクトと向き合うような形になり、とても真剣な表情でアーキテクトをじっ・・・と見つめている。
対照的にアーキテクトは、なんか物凄い笑顔をマテリアに見せていたのだが。

『ほう・・・最初の相談者が、よりにもよってお前とはな。』
『実はアキトさんに、どうしても相談したい事がありまして・・・』
『お前とは城で毎日顔を合わせているのだ。わざわざこんな世界中で流れるバラエティ番組で、大衆に顔を晒してまで相談なんかせんでもいいだろうに。』
『いえ、むしろ世界中の人々に知って貰いたいんです！！私がシオンさんに対して、どれだけ深い愛情を抱いているのかという事を！！』

ぶぶぶぶぶーーーーーーーーーーーーっ！！
いきなりのマテリアの爆弾発言に、シオンは口に含んでいた緑茶を盛大に吐き出してしまった。

『実は相談というのはシオンさんの事についてなんです。私はあの内乱騒ぎの際に、私の身も心も救って下さったシオンさんにとても深い感銘を受けまして・・・それで私、シオンさんに愛の告白をしたんです。』
『そう言えばこの国では、一夫多妻制が認められているのだったな。』
『そうなんです。シオンさんにはステラちゃんという正妻がいるのですが、私はステラちゃんから正妻の座を奪うつもりなんか微塵もありません。あくまでもシオンさんの側室でいいんです。』
『何だそのギャルゲーみたいな展開は。シオンめ爆発しろ。』
『ですがシオンさんったら、私が告白をしてからもう3日も経っているというのに、未だに私の事を受け入れて下さらなくて・・・！！』

「いやいやいやいやいや、何でそんな事を世界中に晒すような真似をするんだマテリアああああああああああああああああ（泣）！？」

泣きそうな表情のシオンを、食堂の人々がじぃ～～～～～～～～っと見つめている。
痛い。周囲からの視線が物凄く痛い。というかシオンは思い切り世界中の晒し者になってしまっていた。
ただでさえシオンはルクセリオの英雄として、中尉として、世界中に名が知られた存在だというのに、さらにこんな事まで世界中に暴露されてしまったのでは・・・。
なんかもうシオンは、穴があったら入りたい気分になってしまっていた。

『ステラちゃんは私の事を、ちゃんと受け入れてくれたんです。ですがシオンさんったら、正妻が側室を作る許可を作ってくれたというのに、未だに私の事を受け入れて下さらないんです。』
『あの馬鹿は堅物だからな。奴の事だ。妻は1人しか持たないのが普通だとかヘタレな事を言っているのだろう？』
『そうなんです！！シオンさんはとても素晴らしい方なんです！！いずれはエミリア様の後を継ぎ、この国の王となられるべきお方！！そんなシオンさんが妻を1人しか娶（めと）らないなんて、そんなの世間様に顔向け出来ません！！』
『今は亡き皇帝ヴィクターには、7人の妻がいたと聞く。奴も英雄ならば、それ位の気概を持ってもいい物なのだがなあ。』

ヒソヒソヒソヒソヒソ・・・。
食堂の人々がヒソヒソ話をしながら、一斉にシオンに厳しい視線を向けていた。
と言うか世界中で流れるバラエティ番組で、マテリアは何とんでもない事を暴露しているのか。
なんかもうシオンは、心の奥底から不安になっていた。
陛下やマチルダたちは、今頃僕の事をどう思っているのかなぁ・・・と。

『それでアキトさんに相談しに来たんです。一体どうすればシオンさんの心をステラちゃんだけでなく、私にも向けさせられるのかと・・・！！』
『成る程な。お前の言いたい事はよく分かった。ならば難しい事など何も無い。お前のやるべき事は実に単純明快だ。』
『そ・・・それは・・・！？』

アーキテクトが物凄い笑顔で、マテリアにとんでもないアドバイスを告げたのだった。

『お前バンパイアだろ。だったら吸えばいいじゃないか。』
『・・・っ！？』

アーキテクトの言葉でマテリアは、なんか物凄く感動した表情を見せたのだった。

『奴は英雄だと言っても所詮はヘタレだからな。とっとと既成事実を作って、奴を身も心も言い逃れ出来ない状況に追い込んでしまえ。』
『・・・そうですよね・・・吸えばいいんですよね・・・私、そんな簡単な事に何で今まで気が付かなかったんだろう・・・。』
『人は目の前の出来事に夢中になると、他の事に目が回らなくなってしまう。それで正常な判断力が失われてしまう物なのだ。お前がこんな事に気が付かなかったのは責められんよ。』

そう、それはアーキテクトとて同じ事だ。マテリアにアドバイスを送りながら、アーキテクトはそれを改めて実感させられていた。
ルクセリオ公国で初めてシオンと戦った時、追い詰めたシオンに止めを刺す事に夢中になってしまうあまり、シオンが巧みに仕掛けたレールガン（陽電磁砲）という罠を見落としていたのだ。スティレットからの警告が無ければ今頃どうなっていたか・・・。
懐かしさのあまりアーキテクトは、ついしみじみと感慨に耽ってしまったのだった。

『ありがとうございましたアキトさん！！私、城に帰ったら早速シオンさんを吸ってきます！！』
『本日の格言！！私の物にならぬなら！！吸ってしまえ！！ホトトギス！！』

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！
なんか食堂にいる人たちが物凄い勢いで、一斉にマテリアを応援し出したのだった。
中には涙を流しながら、感動のあまり号泣する者までも。

「い、一体僕の何を吸うつもりなんだ！？」
『待っていて下さいねシオンさん・・・すぐに吸ってあげますから・・・じゅる・・・じゅるじゅる・・・ぐへへ、ぐへへへへへ・・・！！』
「だから僕の何を吸うつもりなんだマテリアあああああああああああ！？」

ヨダレを垂らしたマテリアを見て、慌てふためくシオンだったのだが・・・その時だ。
突然番組が中断され、液晶画面にニュースキャスターの姿が映し出された。
盛り上がってる所へ水を差されて文句を言い出す人たちがいたのだが・・・とても緊迫した表情でニュースキャスターが告げた緊急事態に、その場にいた全員が緊迫した表情になる。

『番組の途中ですが、ここで緊急臨時ニュースをお送りします！！たった今グランザム帝国の新皇帝が、ルクセリオ公国からの降伏勧告を拒否し戦争を継続する意向である事を、正式に表明致しました！！』

テレビの液晶画面には椅子にどっかりと腰を下ろし、とてもニヤニヤしながら緊急記者会見に応じるシュナイダーの姿が。
突然の出来事に先程までヘタレていたシオンも、さすがに真剣な表情になったのだった。
スティレットもとても心配そうな表情で、緊急記者会見の様子を見つめている。

『皇帝陛下、ルクセリオ公国からの降伏勧告を拒否するという事は、再びルクセリオ公国に攻撃を仕掛けるという事でよろしいのでしょうか！？』
『ええ、勿論ですとも。何しろ今のルクセリオ公国には、あのシオン君がいませんからねぇ。絶対的なエースを失った今のルクセリオ公国騎士団など、我々の敵ではありませんよ。』
『しかし失礼ながら帝国軍も、同じく絶対的なエースだったリーズヴェルト少尉らフレームアーム

ズ・ガール部隊を失いましたが・・・そんな状態で戦争に勝つ見込みがあるのですか！？』
『では皆さんに紹介致しましょう！！我々の新たなる切り札・・・新生フレームアームズ・ガール部隊の隊長を務める事になりました、カリン・ラザフォード中尉です！！』

シュナイダーの言葉と同時にゼルフィカールを身に纏ったカリンが、威風堂々と記者たちの前に姿を現したのだった。
カメラのフラッシュが、一斉にカリンに浴びせられる。

「・・・カリンちゃん・・・！！」
「知り合いかい？ステラ。」
「士官学校で私とトップの座を争っていた、私の同期です。でも彼女は一身上の都合とかで、士官学校を中退したはずですけど・・・それがいきなり中尉階級って、一体どうして・・・！？」
「・・・そうか・・・ステラと同格の実力者か・・・。」

それだけの実力者が士官学校を辞めたとは、一体何があったというのか。
シオンやスティレットもそうだったのだが、士官学校に在学中は卒業後に軍に入る事を条件として、学費や生活費を国が全額負担してくれる事になっている。
だからこそ、経済的な理由だとは到底考えられないのだが・・・両親に軍人になる事を反対されたのを、スティレットたちの亡命という緊急事態を理由に、臨時招集されたとでもいうのか。
どうやらスティレットも、カリンが士官学校を辞めた『本当の理由』を知らないようだった。

『彼女が身に纏っているのが、我々が開発した新型フレームアーム・・・その名もゼルフィカールです。量産機ではありますが基本性能は、スティレット君たちが使っていた試作機のゼクスを上回っています。』
『量産機と言いましたが、具体的にどれだけの数を量産したのでしょうか！？』
『はい、ざっと10機です。』
『10機！？たった4機しか生産されなかったゼクスでさえも、ルクセリオ公国騎士団をあれだけ苦しめたと言うのに！？それを上回る性能の新型が10機も！？』

物凄い勢いで、カメラのフラッシュが一斉にシュナイダーに浴びせらせる。
一斉にざわめく記者たちの姿に、シュナイダーはとても満足そうな笑みを浮かべたのだった。
確かにそれだけの戦力があれば、シオンを失ったルクセリオ公国騎士団など敵ではない、降伏勧告など受ける必要は無い・・・シュナイダーがそう考えるのも仕方が無いのかもしれないが。

『陛下、失礼ながら申し上げます。我々が独自に入手した情報によると、ルクセリオ公国騎士団もパワードスーツをさらに量産し、また新型パワードスーツの開発にも成功したとの事ですが、それでも戦争に勝てるという自信は揺るがないのでしょうか！？』
『ええ、彼らが何をしてこようが、どんな新兵器を用意しようが、我々の勝利は揺るぎませんよ。』
『戦争を継続する事に反発する国民も出る事が予想されますが、その対応はどうなさるおつもりなのでしょうか！？』
『私は父上のように馬鹿正直に真正面から戦争する程、馬鹿ではありませんよ。戦争というのは無駄な犠牲を極力出さず、もっとスマートな勝ち方をしなければ。』

そう告げたシュナイダーは立ち上がり、マイクを手に威風堂々と演説を開始したのだった。
この戦争に必ず勝てると。この国はルクセリオ公国に降伏などしない、奴らにこの国を蹂躙させたりはしない、我々こそがこの世界の頂点に立つ者なのだと。

「愚かな・・・また同じ過ちを繰り返すつもりなのですか・・・！！」

終わったはずの戦争を、また再開させようとする・・・そんなシュナイダーの愚かな姿を、自室のテレビで記者会見を見ていたエミリアが、とても厳しい表情で見つめていたのだった。

2. 再開された戦争

そして翌日の朝・・・遂にグランザム帝国軍がルクセリオ公国城下町へと進軍を開始した。
シュナイダーの指揮の下、グランザム帝国軍が左右から挟撃を仕掛けるように部隊を展開。それをルクセリオ公国騎士団が迎え撃つような形になる。
両軍の弾幕が激しく飛び交う中、壮絶な戦闘を繰り広げる両者ではあるが・・・グランザム帝国軍の切り札であるカリンら新生フレームアームズ・ガールたちは、未だに戦場に姿を現さなかった。
以前スティレットたちが攻めてきた時と、全く同じ状況・・・陽動作戦の後に切り札を万全の態勢で、要所で投入するつもりなのか。
それも踏まえてなのかルクセリオ公国騎士団は、前回の時とは違い無闇な追撃をせずに陣形の維持に努めており、それ故に戦闘は両軍共に一進一退の膠着状態に陥っていた。

だがシオンが不在とはいえ、グランザム帝国軍がスティレットたちを失った穴もまた大きく、やはりパワードスーツをさらに量産したルクセリオ公国騎士団の方が優勢のようだ。
それだけではなく、開発が終了したばかりの新型・・・パワードスーツ・ツヴァイを身に纏った元シオン隊のメンバ・・・リック隊の活躍も大きかった。

「はあああああああああああああああああああああああっ！！」

怪我が完治し、ようやく部隊に復帰したマチルダが、ビームサーベルで果敢に帝国兵たちを斬り捨てていく。
そのマチルダを背後から狙い撃とうとする帝国軍のモビルアーマーのコクピットを、リックが放ったビームバズーカランチャーによる砲撃が貫いた。
マチルダの背後で、派手な音を立てて爆発するモビルアーマー。

「いけるぜ、この新型パワードスーツ！！」

オスカルたちのビームマシンガンが、次々と帝国兵たちを一網打尽にしていく。
試作機としてリック隊に支給されたパワードスーツ・ツヴァイの性能は圧倒的で、旧型とは比べ物にならない程、機動性と火力が向上されていた。
恐らく基本性能だけならば、スティレットたちが使っていたフレームアームさえも完全に上回っているのではないだろうか。
もっと早くこの新型の開発が終了していれば・・・リック隊の誰もがそう思っていたが、それを悔やんだ所で何もならない。今はこのパワードスーツ・ツヴァイの力でもって、襲い掛かるグランザム帝国軍から城下町を・・・そして人々を守らなければ。

「ナナミ曹長！！例の新型はまだ出てこないのか！？」
『現在それらしき熱源は未だ感知されていません。前回のオラトリオ大尉たちの時の様に、陽動の可能性もありますが・・・。』
「そうだな、その備えもしっかりしておかないとな！！総員深追いはするなよ！！あくまでも防衛

線の維持を最優先しろ！！」
「「「「「「了解！！」」」」」」」

シオンの代わりに隊長となったリックが、部下たちに対して号令を出す。
きっとシオン隊長なら俺なんかと違って、もっと大胆かつ繊細な作戦を立てるだろうが・・・そう考えてしまうリックだったが、それでも今のリックではこれが精一杯だ。
スティレットたちが使っていた物よりも、さらに高性能の新型フレームアームが10機・・・記者会見でシュナイダーが暴露した情報がある以上、リックたちも下手に帝国兵たちを深追いをする訳にはいかなかった。
いや、もしかしたらそれさえも、シュナイダーの戦略の内なのかもしれないが。
その戦いの様子をカリンたちが、空中に浮かぶ輸送艦のリニアカタパルトから、モニター越しに眺めていた。

「・・・ルクセリオ公国騎士団・・・随分と情けない戦い方をするのね。」

ルクセリオ公国騎士団が押され気味のグランザム帝国軍を深追いせずに、防衛線の維持を最優先した事で、膠着状態に陥っている・・・そんな今の戦況を見たカリンが、厳しい表情でそう呟いたのだった。

「それだけ私たちの事を警戒しているって事よ。カリンちゃん。」

そんなカリンに穏やかな表情で話しかけてきたのは、カリンと同じくゼルフィカールを身に纏った少女、リアナ・トラヴィス少尉だ。
士官学校ではカリンと同期で、中退してしまったカリンの事をずっと気にかけていたのだが・・・カリンが軍に復帰し、自分たちの隊長になった事を心から嬉しく思っているようだ。
リアナも含めてカリン隊の少女たちは、全員が士官学校で優秀な成績を収めたとはいえ、実戦経験がそれ程多いとは言えない。
だからこそ士官学校でスティレットとトップの座を争っていたカリンの存在は、リアナたちにとって心強くはあるのだが。

「そうね。彼らがシオン・アルザードを失った事も影響してるのかもね。」
「でもどうして皇帝陛下は、私たちに出撃命令を下されないのかしら？」
「陽動のつもりなのかしらね。でも私ならそんなチマチマとせこい真似なんかしないわ。」

そもそもルクセリオ公国騎士団がカリンたちを警戒し、深追いせずに防衛線の維持に努めている現状では、陽動しようにも全然陽動になっていないのだが。
戦況は依然として膠着状態ながら、ルクセリオ公国騎士団が優勢・・・見かねたカリンが舌打ちし、シュナイダーに通信を送った。

「もう見ていられないわ。私たちも出るわよ。」
『おや？君たちには待機を命じていたはずですがねぇ。』
「彼らのペースに乗せられ過ぎよ。私たちが今の戦況を変えてみせるわ。」
『やれやれ、血気盛んなお嬢さんですねぇ。まぁいいでしょう。そんなに暴れたければ好きに暴れてきていいですよ。』

命令があるまで待機してろって言ったのに・・・シュナイダーはやる気マンマンのカリンの姿に苦笑いしたのだった。

『もっとも、君たちが今更出撃した所で、君たちが活躍する機会があるとは到底思えないのですがねぇ。』
「はあ！？戦況は依然として私たちが押されているのよ！？何か策があるとでも言うの！？」
『それはまぁ、見てのお楽しみという奴です。』
「・・・まあいいわ。暴れてもいいって言うなら好きに暴れさせて貰うわよ。」

依然として余裕の態度を崩さないシュナイダーの事は気になるが、それでもようやく出撃許可が下りたのだ。
この戦況を一気に覆してやる・・・カリンはその決意を固めていた。

『リニアカタパルト接続、ゼルフィカール全機全システムオールグリーン。発進シークエンスをカリン隊長に譲渡します・・・進路クリア。カリン隊発進どうぞ！！』
「これより城下町へと奇襲をかける！！カリン隊、出るわよ！！」
「「「「「「「「「イエス、マム！！」」」」」」」」」

オペレーターからの号令と共に、カリンら新生フレームアームズ・ガール部隊が遂に戦場へと飛翔した。
そして苦戦を強いられているグランザム帝国軍の救世主となるかの如く、その圧倒的な戦闘能力を存分に見せつけたのだった。

「いくわよ！！ルクセリオ公国騎士団！！」

カリンのビームサーベルによる斬撃が、まるでハサミで紙を切るかの如く、一瞬で戦車を真っ二つにしてしまった。
派手な音を立てて、カリンたちの背後で爆発する戦車。それを気にする事無くカリンたちは突撃を仕掛ける。
慌てて迎撃するルクセリオ公国騎士団だったが、パワードスーツを身に纏った兵士たちのビームマシンガンによる弾幕でさえも、カリンたちは易々とビームシールドで防いでみせた。

それとは対照的にカリンのビームサーベルが、兵士たちのパワードスーツの装甲さえも、易々と突き破ってしまう。
そんな先陣を切って暴れるカリンをリアナたちがビームマシンガンで援護し、兵士たちを次々と絶命させていく。
ゼルフィカールとパワードスーツでは、あまりにも火力が違い過ぎる・・・それだけでなくカリン自身が、帝国軍最強の剣士とまで呼ばれたスティレットに匹敵する実力者なのだ。それを目の前で見せつけられたアルフレッドが、とても悔しそうに歯軋りしたのだった。

「何て手応えの無い・・・シオン・アルザードがいなければ、この程度なの・・・！？」
「小娘共がぁ、よくも私の部下たちをぉっ！！」

カリンの斬撃を辛うじてビームサーベルで受け止めるアルフレッドだったが、それでもあっけなく吹っ飛ばされてしまった。

「おのれ、まだまだぁっ！！」

体勢を崩されながらもビームマシンガンをカリンに向けて乱射するアルフレッドだったが、カリンを

庇うかのように立ちはだかったリアナが、ビームシールドで易々と受け止める。

「リアナったら、余計な真似をしなくていいわよ。」
「カリンちゃん1人だけに負担を掛ける訳にはいかないのよ。」
「まぁ一応礼だけは言っておくわ。」
「もう、素直じゃないんだから。」

何とか立ち上がったアルフレッドだったが、それでもゼルフィカールの圧倒的な性能に、完全に気圧されてしまっていた。
スティレットのフレームアームの機動性、アーキテクトのフレームアームの防御力、そして轟雷と迅雷のフレームアームの高火力。
ゼルフィカールは量産機でありながら、これら全ての面を兼ね備えたバランス型のハイスペックな機体であり、基本性能はスティレットたちが使っていた旧型機を完全に凌駕しているのだ。
それ程の高性能機を身に纏った少女たちが、10人も・・・兵士たちの多くが絶望の表情を隠せずにいた。

「総員このまま一気に城下町へと突入して指令室を占拠。こんな下らない戦争、私たちでさっさと終わらせるわよ！！」
「「「「「「「「「イエス、マム！！」」」」」」」」」

そんなアルフレッドたちを無視し、カリンたちはさっさと城下町へと突撃していく。
いくらゼルフィカールが高性能機だと言っても、そのエネルギーは無限ではないのだ。予備のバッテリーパックは常備しているものの、無駄な戦闘で無駄にエネルギーを消耗させる訳にはいかないのだ。

「くそっ、我々など眼中に無いとでも言いたいのか・・・っ！！」
『アルフレッド大尉、我々が奴らを止めて見せます！！』
「な・・・オーケン少尉か！？」

だがそんなカリンたちの行動を予測していたかのように、リックたちがカリンたちの前に立ちはだかった。
リックたちが放つ弾幕の前に、さすがのカリンたちも引き気味にならざるを得ないようだ。城下町への突撃を中断し、ビームシールドで弾幕を受け止める。

『済まないオーケン少尉！！奴らに対抗出来そうなのは新型を身に纏ったお前たちだけだ！！何とかして奴らを止めてくれ！！』
「了解！！行くぞお前たち！！あの小娘共に我々の力を見せつけてやれ！！」
「「「「「「「了解！！」」」」」」」

リックの号令と共に、マチルダたちがカリンたちと激しい死闘を繰り広げる。
パワードスーツ・ツヴァイとゼルフィカール。両陣営の新型機が戦場で激しく乱れ舞う。

「新型だか何だか知らねえけどなぁ、俺らだって新型なんだよぉっ！！」
「さすがにこの人たちは手強い・・・それにこの新型の性能も侮れないか・・・！！」

オスカルの斬撃を、辛うじてビームサーベルで受け止めるリアナ。
パワードスーツ・ツヴァイの性能は、ゼルフィカールにも充分に対抗出来ている・・・それを確信し

たリックたちが一気に押せ押せムードになった。
　そのまま鍔迫り合いの状態でオスカルと睨み合うリアナを援護しようと、カリンがビームサーベルでオスカルに斬りかかろうとするが、邪魔はさせまいとマチルダが立ちはだかる。

「これ以上貴方たちの好きにはさせないわよ！！ラザフォード中尉！！」
「この・・・病み上がり風情が生意気なのよぉっ！！」

　マチルダとカリンがビームサーベルをぶつけ合うが・・・その時だ。
　突然上空に向けて放たれた、一筋の信号弾。それを見たマチルダたちが驚愕の表情になる。
　まさか、この状況で有り得ない・・・信じられないと言った表情で、マチルダは目の前のカリンを放り出して、信号弾が放たれた上空を見つめていた。
　放たれた信号弾が意味する物・・・それは・・・。

「・・・そんな・・・戦闘中止命令・・・それに降伏・・・！？一体どういう事なの！？」

　マチルダだけでなく生き残ったルクセリオ公国騎士団の全員が、何が起こったのか全然意味が分からないと言った表情をしていた。
　無理も無いだろう。マチルダたちがカリンたちを抑えている事で、戦況は再びルクセリオ公国騎士団が優勢になりつつあるというのに、この状況でグランザム帝国軍に降伏とは。
　だが次の瞬間マチルダたちの端末に、信じられない映像が送られたのだった。

『・・・ふっ、お前たち。これは一体何の真似だ？』

　それは大臣たちの命令でジークハルトにビームマシンガンの銃口を向けている、いつの間にか侵入していたグランザム帝国軍の兵士たちの姿だった。
　銃口を向けられても尚、ジークハルトは腕組みをしながら威風堂々とした態度を崩さない。国王としての、人の上に立つ者としての意地という奴なのか。
　指令室にいるナナミも含めた他のオペレーターたちもまた、グランザム帝国軍の兵士たちにビームマシンガンの銃口を突き付けられている。
　一体全体、何がどうしてこうなったというのか。

『総員に警告する！！この愚かな男を殺されたくなければ大人しく戦闘を中止し、シュナイダー殿に従うのだ！！』
『よくやってくれましたね大臣の皆さん。この作戦が上手くいったのは、全て大臣の皆さんの協力があればこそです。』
『シュナイダー殿、これで我々の身の安全と地位は保障してくれるのですよね！？』
『ええ、勿論ですとも。約束の報酬もきちんと払いますので、ご安心を。』

　まさか、大臣たちが裏切ったのか・・・それも自分たちの我が身可愛さと報酬目当てに。
　その無様な醜態を見せつけられたオスカルが、目の前のリアナをほったらかしにして怒りを露わにしたのだった。

「こ・・・この、金と権力に目が眩んだ裏切り者共がぁっ！！」
『動くなよナーブソン少尉。ジークハルトやキサラギ曹長が殺されてもいいのか？ん？』
「てめえら自分たちが何やってんのか、本当に分かってるのかよ！？」

　ジークハルトやナナミが銃を向けられている光景をまざまざと見せつけられたのでは、さすがの

オスカルも目の前のリアナに手出しする事が出来なかった。
　いや、むしろカリンたちさえも、目の前の出来事に驚きと戸惑いを隠せないでいるようだ。

「ちょっとシュナイダー！！これは一体どういう事なの！？」
『見て分かりませんか？大臣の皆さんに伏兵の手引きをして頂いたのですよ。それで隙を見てジークハルトさんを拘束させたという訳です。』
「・・・私たちの出番は無いって、そういう事だったの・・・！？随分と趣味が悪い男なのね。」
『戦争というのは、もっとスマートに勝たなければならないと・・・私はそう言いましたよね？まあ何にしても、これでルクセリオ公国の制圧は無事に完了です。皆さんお疲れ様でした。』

　ニヤニヤするシュナイダーだったが、そこへマチルダが怒りの形相で、カリンが手にした端末を強引に奪い取った。

「貴方、一体いつの間に大臣たちを買収したのよ！？」
『おやマチルダ君。私に対してそんなに反抗的な態度を取っちゃって、本当にいいんですか？』
「何ですって！？」
『人質は何もジークハルトさんだけではないのですよ。特に君は優秀ですから、これからも私の為に是非とも働いて貰いたいですからねぇ。』
「貴方、一体何を訳の分からない事を・・・っ・・・！？」

　シュナイダーの言葉と同時に、カリンの端末に映った映像・・・それはいつの間にか拘束されていたミハルが泣きそうな表情で、牢屋に閉じ込められている光景だった。
　それを見せつけられたマチルダが、途端に絶望の表情になる。

「・・・ミ・・・ミハル・・・！？そんな・・・何で・・・！？」
『まあそういう訳です。私に逆らえば彼女がどうなるか・・・賢明な君ならば分かりますよね？』
「嫌あああああああああああああああ！！ミハルーーーーーーーーーーーーーっ！！」
『さて、そんな絶望しちゃってる君に早速命令です。すぐに城下町に戻って補給を済ませ、出撃の準備を整えて下さい。これから君たちにはコーネリア共和国を襲撃して貰います。彼らが独占している魔法化学技術を我々の物にする為にね。』

　何て悪趣味な・・・シュナイダーに侮蔑の目を向けるカリンだったが、それでもマチルダに同情はしなかった。
　父親が勝手に押し付けた借金をシュナイダーに払って貰う為だというのもあるが、何よりも今の世の中はこんな不条理な事ばかりなのだと、カリンは完全に割り切ってしまっているのだから。
　カリンに言わせれば無様に人質にされて、マチルダに迷惑をかけたミハルが悪いのだ。
　ミハルがもっと強ければ、人質になどされなければ、こんな事にはならなかったのだ。
　そう、世の中結局こんな物だ。弱者は強者に蹂躙される世の中なのだ。
　高笑いするシュナイダーを、カリンは汚物を見るかのような瞳で見つめていたのだった。

3. 襲撃

　ルクセリオ公国敗戦、そしてジークハルトとミハルが捕らえられたというニュースは、瞬く間に世界中を駆け巡り、大騒ぎになってしまっていた。
　あっという間にルクセリオ公国の城下町はグランザム帝国の支配下に置かれ、派遣された帝国

兵たちが情け容赦なく城下町を蹂躙する。
　ジークハルトとミハルを人質にされている以上は、ルクセリオ公国騎士団の兵士たちも、帝国兵たちに下手に手を出す事が出来ずにいた。
　目の前に敵兵がいるのに、守るべき国民たちが怯え、傷つけられているというのに、何も出来ない・・・騎士団の兵士の誰もがその憤りを胸に秘め、悔しそうな表情をしていたのだった。

　そして一夜明けた翌日・・・息つく暇も無いままリック隊のメンバーは、シュナイダーの命令でコーネリア共和国への襲撃を余儀なくされる事になってしまう。
　コーネリア共和国が独自に運用している魔法化学技術・・・それを帝国の物にする為に。
　ジークハルトだけでなくミハルまで人質にされてしまったのでは、リックたちもシュナイダーの命令に従わざるを得なくなってしまっていた。
　仮に片方の人質を無事に救助出来たとしても、別の場所に捕らえられたもう1人の人質を即座に殺されてしまう・・・いや、拷問によって生き地獄を味あわされる事になるかもしれない。これではリックたちはシュナイダーに逆らう訳にはいかなかった。
　まさに二段構えの戦略・・・シュナイダーはそこまで考えてミハルを人質を取ったのだ。

　リックたちを乗せた輸送艦ビスマルク、そして監視役のグランザム帝国軍の輸送艦3隻が、コーネリア共和国の領地内へと侵入する。
　その様子は世界中の戦場カメラマンによって、今や全世界で生中継される騒ぎになっていた。

「ジャクソン。例の新型はどうなっていますか？」

　エミリアの呼びかけで指令室のモニターに映されたのは、ジャクソンと呼ばれたアリューシャの祖父の姿だった。
　作業着を着たジャクソンの背後で、魔法化学研究所の職員たちが慌ただしく作業を進めている。

『イクシオンはエンゲージ・システムの調整を始めたばかりで、とてもじゃねえが出せる状態じゃねえ！！量産機のスティレット・ダガーも最終調整にあと15分は必要だ！！』
「では完成したばかりのヴァルファーレは？先程の運用テストの結果はどうなったのですか？」
『結果は散々だ！！まともに使いこなせる奴が誰もいやしねえ！！あまりにもピーキー過ぎて普通に飛ぶ事すら困難だって、兵隊共に散々文句を言われたよ！！』
「そうですか・・・！！」
『兵隊共の誰もが口を揃えて言いやがる！！あれを使いこなせる奴は変態だってよ！！』

　ジャクソンの言葉でエミリアは厳しい表情を見せる。
　どれだけ強力な兵器を有していようとも、使えなければ宝の持ち腐れだ。そうこうしている間にもリック隊と監視役のグランザム帝国軍が、情け容赦なく城下町から目視出来る距離にまで迫ってしまっていた。

「エミリア様！！戦況は！？」

　そこへシオンがスティレットと共に、慌てて指令室にやって来た。
　指令室ではオペレーターの女性士官たちの、リック隊や帝国兵たちに領地侵犯だと訴えたり、兵士たちに指示を出したりと、慌ただしく騒ぐ声が響き渡っている。

「見ての通り、貴方のかつての部下たちが目の前にまで迫っています。恐らくは監視役であろう帝国軍も一緒にね。」

「そうですか・・・マチルダたちが、もうすぐそこまで・・・！！」
「それにしても、人質を取ってまで敵兵に戦闘を強要するとは・・・何て愚かな事を・・・！！」

エミリアたちがいる指令室のモニターには、魔法化学研究所に駆けつけたアリューシャたちが、新型フレームアームが完成するのを今か今かと待ち続けている光景が映し出されていた。
もう運用テストとか言っていられる場合ではない。何しろ敵が目の前に迫っているのだ。アリューシャは明らかに焦っていたのだが。

『お爺ちゃん、私たちのスティレット・ダガー、まだ～！？』
『馬鹿野郎！！だから最終調整を今やってる最中だって言ってんだろうがぁ！！』
『そんなぁ～！！』

モニター越しにアリューシャがジャクソンに文句を言っている光景を見たシオンが、とても厳しい表情を見せる。
マチルダたちが身に纏っているパワードスーツ・ツヴァイの性能は、シオンも前回の戦闘をテレビ観戦していて充分に思い知っていた。それに監視役として同伴しているであろうグランザム帝国軍も、恐らくはパワードスーツを鹵獲して使用しているはずだ。
それだけの戦力を相手にするには、いかに優れた戦力を誇るコーネリア共和国軍と言えども、やはりアリューシャらフレームアームズ・ガールたちの存在が必要不可欠だ。だが肝心のフレームアームが使えないとなれば、状況は厳しいと言わざるを得ない。

『うううう～、だったら私がステラちゃんのゼクスで出る！！』
『あれはもっと駄目だ！！今マテリア用に強化改修してる真っ最中だ！！』
『じゃあこのまま黙って見てろって言うの！？』
『そうだ黙って見てろ！！それが今お前らがやるべき事だ！！』

そんなアリューシャとジャクソンのやり取りが、城のリニアカタパルトで待機しているアーキテクト、轟雷、迅雷の所にも聞こえていた。
何かあった時にすぐに出撃出来るように、フレームアームを装備して待機しているのだが・・・果たして精鋭を誇るマチルダたち、しかも新型のパワードスーツ・ツヴァイを相手に、この旧型機でどこまで太刀打ち出来るのか。

『悪いな。聞いての通り、嬢ちゃんたちの分のスティレット・ダガーもまだなんだ。済まねえがその旧型機のゼクスで我慢してくれねぇか？』
「何、俗物共が相手ならこれで充分ですよ。ジャクソン殿。」

アーキテクトは余裕の態度でそう返すが、それでも内心では不安を感じていた。
新型機の最終調整が終わるまで、アリューシャたちが出撃出来るようになるまで、何とかエミリアが時間を稼いでくれる事をアーキテクトは祈っていたのだが。

『・・・こちらルクセリオ公国騎士団、マチルダ・アレン伍長です。無礼を承知ながらエミリア王妃殿下に是非お願いしたい事があり、通信を送らせて頂きました。』

そこへ突然ビスマルクから、パワードスーツ・ツヴァイを身に着けたマチルダからの通信が届いた。
指令室のモニターにでかでかと映し出されたマチルダの姿・・・だが毅然と振る舞いながらもミハルを人質に取られた事で、どこか憔悴し切っているようにも見える。

「マチルダ・・・！！」
『お久しぶりです、シオン隊長。こんな形で再会する事になってしまい、本当に残念です。』
「・・・ああ、僕もだ。」
『シオン隊長も御存知でしょうが私たちルクセリオ公国騎士団は、大臣たちの裏切りにより陛下とミハルを人質に取られ、グランザム帝国軍に無様な敗北を喫しました。そして皇帝シュナイダーの命令で私たちは、こうしてこの国に襲撃を仕掛けざるを得なくなってしまいました。この国の魔法化学技術を帝国の物にする為に。』

それはつまり下手をすれば、かつての上官であるシオンとも戦う事になる可能性がある事も意味するのだ。
上官として尊敬し、同時に密かな想いも胸に抱くシオンとの殺し合い・・・それがマチルダには何よりも耐えられなかった。
だがそうしなければ、人質に取られたジークハルトとミハルが、一体どうなるのか・・・。
意を決したマチルダは、突然エミリアに向かって土下座したのだった。

『エミリア王妃殿下、誠に恐れながら殿下にお願いがあります！！どうか貴国が独自運用している魔法化学技術を、帝国に提供して頂けませんか！？』
「貴方、一体何を馬鹿な事を・・・！！」
『皇帝シュナイダーが欲しがっているのは、あくまでも魔法化学技術です・・・それさえ手に入れば皇帝シュナイダーも、この国を攻めようなどと考えないでしょう！！ですから・・・！！』

シュナイダーがマチルダたちに下した命令は、魔法化学技術を手に入れて来いという事だけだ。
だからこそ、逆に言えば魔法化学技術さえ手に入れてしまえば、シオンたちと無駄な殺し合いをする必要は無くなるのではないか・・・そうマチルダは考えているのだ。
無茶苦茶な事を言っているのは分かっている。自分の土下座という行為が、誇り高きルクセリオ公国騎士団の一員として相応しくないという事も。だがそれでもマチルダはなりふり構っていられなかった。

『あっはっはっはっは！！マチルダ君、突然いきなり何をやらかすのかと思えば・・・君は実に滑稽ですねぇ！！』

だがそんなマチルダの決意をあざ笑うかのように、シュナイダーが通信に割り込んできた。
椅子にどっかりを腰を下ろして、ニヤニヤしながらふんぞり返るシュナイダーの傍には、彼のボディーガードを務める軍服姿のカリンの姿が。

『シュナイダー・・・！！』
『コーネリア共和国の魔法化学技術なんて、別にその気になればいつでも強奪出来るんですよ。私はねぇ、ただ単に君たちとシオン君が殺し合う光景を見たいだけなんですよ。』
『な・・・何ですってぇ！？』

立ち上がったマチルダが、シュナイダーのあまりの非道さに怒りを露わにしたのだった。
これが、こんな事が、仮にも国の頂点に立つ者がやる事なのか。
だがジークハルトとミハルを人質に取られている以上、マチルダも下手に逆らう事が出来なかった。それがマチルダの心を絶望へと突き落としてしまう。

『かつての上官を相手に、人質にされた妹の為に命を懸けて立ち向かう・・・実に美しい光景じゃないですか！！』

『くっ・・・シュナイダー・・・貴方だけは絶対に許さない・・・！！』
『ほらほら、シオン君も早くパワードスーツで出撃しちゃって下さいよ。早くしないとマチルダ君たちが城下町を焼き払っちゃいますよ？最も君のパワードスーツの性能では、マチルダ君たちの新型には到底太刀打ち出来ないでしょうけどねぇ。』

確かにシュナイダーの言う通りだ。幾らシオンでもパワードスーツ・ツヴァイを身に纏ったマチルダたちを全員まとめて相手にするとなると、旧型機のパワードスーツでは荷が重すぎる。
アリューシャたちが出れるようになるまで、あと10分程度・・・それまで何とか時間を稼げればと思ったのだが、シュナイダーはそこまで待ってはくれないようだ。

「・・・シュナイダー。2つ質問してもいいかな？」

それでもシオンは冷静な態度を崩さず、不安そうな表情のスティレットの左手を右手で優しく握りながら、モニター越しにシュナイダーをじっ・・・と見据えた。

『おや、時間稼ぎのつもりですか？まあ別にいいんですけどね。質問を許可しましょう。』
「まず1つ目。君は陛下とミハルを人質に取ってマチルダたちに戦闘を強要しているけど、これは明らかな国際条約違反だという自覚はあるのかな？今の君は世界中から非難を浴びせられてもおかしくは無い状況だと思うんだけど。」
『ああ、別にそんなの私には関係ありませんよ。だっていずれは世界中の国々を全て支配するつもりですからねぇ。』
「・・・そうか。君はそこまでの野心を抱いているというのか。」

世界中の国々を全て支配するつもりならば、確かに国際条約など知った事ではないのかもしれないが、まさかここまで大っぴらに世界征服を宣言してしまうとは・・・余程肝が据わっているのか、それが実現出来るという確固たる自信でもあるのか。

『それで？2つ目の質問とは？』
「陛下は今、どうしている？」
『おや、やはり気になりますか？まあ君にとっては父親も同然ですからねぇ・・・ジークハルトさんなら無事ですよ。今の所は・・・ね。』
「そうか無事なのか。なら問題ないな。」

そう告げたシオンの余裕ぶっこいた態度に、シュナイダーは明らかに機嫌を悪くしたのだが。

『・・・何ですか君のその態度は？確かにジークハルトさんは今は無事ですが・・・今殺したって私としては別に構わないんですよ？』
「シュナイダー。君は陛下を甘く見過ぎだよ。君は陛下を人質にするなんてセコい事をせずに、さっさとその場で殺してしまえば良かったんだ。とは言えあの人を殺すなんて、そんな事は常人には到底無理だろうけどな。」
『何を訳の分からない事を・・・人質はもう1人いるという事を忘れて貰っては困りますよ？』

シュナイダーの言葉と同時に、下着姿にされてベッドの上で鎖に繋がれたミハルが泣きそうな表情で、全裸になった大臣に犯されようとしている光景がモニターに映し出された。
その光景を見せつけられたマチルダの表情から、途端に血の気が失せてしまう。

『ちょっと、話が違うわよ！！私が貴方の指示に従えばミハルの身の安全は保障するって、そう

私に約束したじゃない！！』
『あー、大臣さん？まだミハル君を犯しては駄目ですよ？マチルダ君の言う通り、人質は無事だからこそ価値があるのですから。』

非道だ下劣だと思ってはいたが、まさかここまで性根が腐った男だとは。シオンは完全に呆れ果ててしまっていた。
こんな男が、国の頂点に立つ皇帝だとは・・・これではグランザム帝国の未来は決して明るいとは言えないだろう。
だがミハルが目の前でここまでされているにも関わらず、シオンは尚も余裕ぶっこいた態度で、深く溜め息をついたのだった。

『シュナイダー殿、私もう我慢出来ませ～ん！！早くこの娘を犯す許可を下さいよ～。』
『・・・あああ・・・陛下・・・！！』
『あぁ？な～にが陛下だ。あんな男、いなくなればただの小便よ。ぎゃはははははは・・・』

そんな大臣の肩を後ろからポン、と叩く人影が。
誰だこんな時に・・・とてもウザそうに振り向いた大臣だったのだが、次の瞬間怯えた表情で、思わず小便を漏らしてしまったのだった。

『・・・は・・・ははは・・・ははははは・・・しょ・・・小便・・・（泣）。』
『ぬうん！！』
『ぶぶぶぶぶぼべるおあああああああっ！？』

顔面を全力で殴られて、吹っ飛ばされて壁に叩き付けられた大臣。
そして怯えた表情のミハルに優しく毛布を被せたのは・・・ルクセリオ公国騎士団の兵士たちに付き添われた、捕らえられたはずのジークハルトだった。

4. 反撃

『ば・・・馬鹿な・・・何故彼がここに・・・！？牢屋に入れたはずでは無かったのですか！？』

予想外の事態に驚きを隠せないシュナイダーだったのだが、そんな彼の事を無視してジークハルトは、今にも泣きそうなミハルを励ますかのように、優しく頭を撫でていた。
ミハルもまた信じられないといった表情で、目の前のジークハルトを見つめている。

『・・・は・・・ははは・・・私、どうせならシオンさんに助けて欲しかったな・・・。』
『ふっ、そいつは悪い事をしたな・・・今までよく頑張った。偉いぞ。』
『・・・ふえええええええええええん！！陛下ああああああああああああああああっ！！』

感極まったミハルは無礼を承知で、思わずジークハルトに抱き着いたのだった。

『怖かった！！本当に怖かったの！！いきなり黒服の人たちに捕まって、牢屋に入れられて、この人に犯されそうになって！！』
『遅くなってしまって本当に済まなかったな。何かあった時にすぐに助け出せるように、お前の身の安全は確保していたのだが・・・こちらも色々と準備に手間取ってな。だがもう大丈夫だ。今まで本当によく頑張ってくれた。』

『うわあああああああああああああああああああああん！！』

号泣するミハルを、優しく抱き寄せるジークハルト。
その様子をシオンは当然だと言わんばかりに、そして対照的にシュナイダーは信じられないといった表情で、モニター越しに見つめていたのだが。

『・・・貴様が帝国の新皇帝か。どれ程の者かと思えば、随分と器量の小さい男ではないか。』
『ふ、ふざけるなぁっ！！そもそも何故貴方が無事にここにいる！？私の部下に拘束され、牢屋に入れられたのでは無かったのですか！？』
『貴様の部下たちなら、私がこの手で全員叩きのめしてやったが・・・それがどうかしたのか？』
『・・・た・・・叩きのめした・・・！？銃を手にした兵隊たちを、丸腰で・・・！？』
『己の力で自らと民を守れぬ者に、国の王たる資格など無いわ。』

ミハルを抱き寄せながらドヤ顔で語るジークハルトに、殴られた大臣が怯えた表情で土下座したのだった。
何という無様な醜態。これが大臣という人の上に立つ者の態度なのか。ジークハルトは心底呆れ果ててしまっていた。
先程のマチルダのエミリアに対する土下座は、誇りを捨ててまで自分とミハルを何とかして救おうと必死になってくれたが故の、まさに称賛すべき土下座・・・だがこの大臣の土下座は違う。ただ単に己の保身に走っているだけの下劣な土下座だ。

『へ、陛下、どうかお許しを！！私はシュナイダーに脅され、その娘を犯せと強要されてしまったのでございます！！』
『ほう、強要だと？その割には随分と嬉しそうだったではないか。』
『え、演技ですよ演技！！私とて心の底からその娘を犯そうなどと考えては・・・！！』
『そうかぁ、演技かぁ・・・。』
『・・・と見せかけて、馬鹿め死ねえぎゃあああああああああああああっ！？』

隠し持っていた銃をジークハルトに向けようとした大臣だったのだが、ジークハルトはシオン顔負けの物凄く俊敏な動きで大臣の拳銃を蹴飛ばし、大臣に壁ドン！！したのだった。

『・・・随分と下手糞な演技だなぁおい。』
『ひ、ひぎいいいいいいいいいいいい！？どうかお許しをおおおおおおおおおおっ！！』
『私を甘く見るなよ？こう見えても私は元軍人からの叩き上げなのだぞ？』

今にもキスしてしまいそうな超至近距離からジークハルトに睨まれた大臣は、すっかり怯えて腰を抜かしてしまったのだった。
そしてルクセリオ公国騎士団の兵士たちに情け容赦なく拘束されてしまった大臣を、ジークハルトは汚物を見るかのような目で見下している。

『私の姿を世界中に流せ！！』
『はっ！！』

ジークハルトの命令で、兵士の1人がビデオカメラのレンズをジークハルトに向ける。
そしてビデオカメラに繋いだノートパソコンの設定を終えた兵士が、準備完了したと言わんばかりにジークハルトに親指を立てたのだった。
それを確認したジークハルトが、威風堂々と世界中に演説を始める。

『誇り高きルクセリオ公国騎士団の兵士たちよ！！そして愛すべきルクセリオ公国の民たちよ！！総員私に傾注せよ！！ジークハルト・ルクセリオ、今ここに健在である！！』

捕らえられたと思っていたジークハルトの威風堂々とした姿に、城下町の人々の誰もが歓喜の声を上げる。
そしてこの時を待っていたと言わんばかりに、今まで密かに身を潜めていたアルフレッド率いる反抗部隊が、城下町に駐留していた帝国兵たちに一斉に銃を向けたのだった。
何も抵抗する暇も与えられないまま、アルフレッドたちに拘束される帝国兵たち。まさかの光景にシュナイダーは驚きを隠せないでいた。

『ば・・・馬鹿な・・・まさかこの私が、彼に踊らされていたとでも言うのですか・・・！？』
『随分とかっこ悪いのね。シュナイダー。』
『くそっ！！くそっ！！くそおっ！！』

カリンに皮肉られ、とても悔しそうに机を蹴飛ばすシュナイダーだったのだが、そんなシュナイダーを無視したジークハルトが、呆気に取られた表情のマチルダたちに命令を下す。

『アレン伍長。お前と両親には後で色々と謝罪しなければならないが、状況が状況だ。今は後回しにさせて貰おう。』
『陛下・・・！！』
『今お前たちが滞在しているコーネリア共和国は中立国だ。ここで我々の方から奴らに戦闘を仕掛けてしまえば、重篤な国際問題になる。お前も色々と悔しい気持ちを抱えているだろうが、こちらからは絶対に手を出すなよ。』
『・・・了解！！』

意を決した表情で、マチルダはジークハルトに敬礼する。
そしてジークハルトはスティレットの手を握っているシオンにも、威風堂々と呼びかけたのだった。

『・・・シオンよ。』
「は、はい！！」
『私は今から私の戦いをする。お前はお前自身の戦いを存分にするがいい。お前の大切な存在であるその娘を、今度こそお前自身の手で守る為にな・・・いいな？』
「・・・はっ！！」

シオンもまた決意に満ちた瞳で、ジークハルトに敬礼をする。
そして次の瞬間モニターに映し出されたのは、シュナイダーの命令で輸送艦から出撃してきた帝国兵たちだった。
モビルアーマーが10機、戦闘機が20機、無人小型戦闘機のキラービーグが100機以上、そしてルクセリオ公国から鹵獲したパワードスーツを身に纏った兵士たちが50人以上・・・次々と城下町に向けて進軍を開始する。
中立国だとか国際条約だとか、今のシュナイダーには本当にそういう事が頭に無いようだ。それを見たシオンが遂に決断した。

「エミリア様、僕のパワードスーツを！！この国を守る為に僕も戦います！！」
「シオン貴方、一体何を言っているのですか！？」
「このまま帝国軍が城下町へと侵攻するのを、僕は黙って見てはいられません！！」

「落ち着きなさい。以前話したでしょう？貴方の役目は戦いではないと。貴方にはこの国の象徴として、ステラと一緒にやって貰いたい仕事が、まだまだ山程あるのですよ？」
「ですが、エミリア様！！」
「ここは私たちに任せておきなさい。わざわざ貴方が出るまでもありませんよ。」

マチルダたちもビスマルクから出撃準備を進めている光景が、でかでかとモニターに映し出されている。恐らく帝国軍が先に攻撃の意思を示した事を口実にするつもりなのだろう。
確かに明らかにルクセリオ公国側の正当防衛が成立する状況であり、これなら中立国の領地内での戦闘行為を咎められる事は無いだろう。むしろ敵だったマチルダたちが事実上味方に加わったような物だ。
これならエミリアの言う通り、確かにシオンが出るまでも無いのかもしれないが・・・それを承知の上でシオンは再び戦場に出る決意を固めたのだ。

「エミリア様。陛下は先程僕に仰いました。ステラを守る為に僕自身の戦いをしろと。確かにエミリア様が仰るように、人々の前で演説したりテレビ番組に出たりするのも、ステラを守る為の僕自身の戦いの1つなのかもしれません。」
「シオン・・・。」
「でもこの国は今、帝国の脅威に晒されています。それなのに戦えるだけの力を持っている僕が、ただアリューシャたちに守られながら黙って見ているだけだなんて、それこそ周囲からの批判の的になってしまうでしょう。国の危機に英雄が戦場に姿を現さないとは、一体何事なのかと。」
「それは・・・確かに貴方の言う通りですが・・・。」
「僕は陛下の言うように、今度こそ僕自身の手でステラを守りたいんです。5年前の過ちを今度こそ繰り返さない為に・・・それが陛下が僕に仰った、僕自身のもう1つの戦いなんです。」

もう二度と、後悔はしたくないから。5年前のあの悲劇を、もう二度と繰り返したくないから。
あの時はシオンにスティレットを守れるだけの力も権力も無かったせいで、スティレットを救ってやる事が出来なかった・・・だが今のシオンにはスティレットを守れるだけの力も、中尉という権力もあるのだ。
その何の迷いも無いシオンの力強い瞳を見たエミリアは、観念したように深く溜め息をついたのだった。

「・・・どうやら決意は固いようですね。分かりました。現時刻をもって貴方にはコーネリア共和国軍に入隊して貰います。」
「はっ！！」
「同時に貴方を大尉へと昇格させ、命令に左右される事無く自らの意思と判断で、独自行動を起こす権限も与えます。そして貴方にこそ相応しい、新たなる翼・・・究極最強の力も。」
「・・・究極最強の・・・力・・・！？」

エミリアは一体何を言っているのか。パワードスーツを渡してくれるのではないのか。
意味が分からずに戸惑うシオンだったのだが、そんなシオンをエミリアは自信に満ちた表情で見つめていたのだった。

「貴方ならば、きっと使いこなしてくれるはず・・・我がコーネリア共和国軍が誇る、この国を守る為の最大の切り札を。」

5. 新たなる翼

『進路クリア！！オラトリオ隊、発進どうぞ！！』
「これよりルクセリオ公国騎士団を援護する！！オラトリオ隊、出るぞ！！」
「「イエス、マム！！」」

アーキテクト、轟雷、迅雷がリニアカタパルトから出撃し、マチルダたちと連携してグランザム帝国軍を迎撃する。
かつて何度も死闘を繰り広げた相手との共闘・・・アーキテクトは感慨めいた物を感じていたのだが、今はそんな事を言っていられる状況ではない。
マチルダと背中合わせの状態になったアーキテクトが、マナ・ビームマシンガンでオスカルを援護する。

その激しい戦闘の最中・・・シオンとスティレットはエミリアとマテリアに連れられて、魔法化学研究所の内部に足を踏み入れていた。
訪れたエミリアたちを、ジャクソンが自信満々の表情で出迎えにやって来る。

「ジャクソン、ヴァルファーレの準備は万全ですね？」
「おうよ！！シオンならきっと使いこなしてくれるさ！！この俺様が汗と涙と鼻水垂らして作り上げた最高傑作をよ！！」

ドヤ顔で自慢したジャクソンに、エミリアが力強く頷く。
一体全体何が何だか、全然意味が分からないシオンだったのだが。
だがジャクソンが扉を開けた先の向こうに、シオンの目に映ったのは・・・これまでシオンにも全く知らされていなかった、シオンが全く予想もしていなかった代物だった。

「・・・フレームアーム！？」

それは全身から神々しい光を放つ、黄金のフレームアームだった。
いきなりの出来事に、シオンは驚きを隠せない。

「これは我が国が開発した、究極最強のフレームアーム・・・その名もヴァルファーレです。」
「ヴァル・・・ファーレ・・・！？」
「数日前に完成したばかりで運用テストをしていたのですが・・・極限まで高機動、高火力を追及した結果、軍の誰もが機体性能に振り回され、まともに扱う事すら出来ないという事態を招いてしまいました。まさに宝の持ち腐れ状態だったのですが・・・シオン、貴方ならばきっと・・・！！」

ヴァルファーレ。それはコーネリア共和国の神話に登場する聖なる神鳥。豊穣の女神ラーミアの使いとして、人々に恵みと祝福をもたらす存在だとされている。
この黄金の輝きを放つフレームアームの背中に取り付けられている神々しい黄金の翼は、まさに伝説の神鳥をシオンの目の前で体現しているかのようだ。

「私は貴方には戦いから離れて、この国の象徴としてステラと共に働いて貰いたかった・・・貴方を再び戦場に引っ張り出す事に正直抵抗はありますが、それでも今の貴方にはその決意も覚悟も

あるのでしょう？ならば私は貴方に、その為の力を与えなければなりません。」
「エミリア様・・・。」
「貴方は命の尊さも、争い合う事の愚かさも、大切な物を目の前で失う悲しみも、誰よりも身に染みて理解している。そんな貴方だからこそ、このヴァルファーレを纏うのに相応しいと・・・そう私は思ったのです。」

5年前、シオンは目の前で泣き叫ぶスティレットを守ってやれなかった。
そして1年前、シオンは自身の娘をその身に宿したアルテナを守ってやれなかった。
それにシオンは戦場で、これまで何度も大切な仲間たちを目の前で失ってきた。
そんなシオンだからこそ誰よりも理解しているのだ。争い事がどれだけ愚かなのかという事を。

そしてそんなシオンだからこそ、エミリアはヴァルファーレをシオンに託したのだ。
緑溢れる自由と平和の国・・・そんなコーネリア共和国を守る為の最強の守護者として。
それにシオンには今度こそ、大切な存在であるスティレットを目の前で失って欲しくないから。その為の力を持っていて欲しいから。
想いだけでは大切な物を守れないから。力だけでもただの暴力に過ぎなくなってしまうから。
想いだけでも、力だけでも駄目なのだ。

「ですがシオン。これだけは覚えておきなさい。貴方も知っているように今のステラは、精神安定剤の数を1日3回に減らしたとはいえ、未だ精神的に不安定な状態にあります。そして今のステラには貴方という存在が絶対に必要なのです。」

エミリアの傍らで名指しされたスティレットが、とても不安そうな表情でシオンを見つめていた。

「貴方がいなくなってしまえばステラの心は、今度こそ完全に壊れてしまうでしょう。もう二度と立ち直る事が出来なくなってしまう程にね。」
「・・・はい。」
「だから死ぬ覚悟で戦おうなんて考えたら絶対に駄目。必ず生きてステラの下に帰ってくるのですよ？いいですね？これは王妃として私が貴方に下す命令です。」
「それは僕が、常日頃からマチルダたちに口酸っぱく言ってきた事ですよ。死ぬ覚悟で戦うな、友と明日の為に戦えとね。」

シオンはスティレットを守る為なら死んでもいいなどと、そんな事は微塵も考えていない。
必ず生きて、スティレットとの幸せの日々を掴み取る。その『生きる覚悟』で戦場に赴くのだ。
シオンはこの国を、そしてスティレットを必ず守り抜く。
エミリアから与えられた究極最強の力・・・このフレームアーム・ヴァルファーレで。
そんなシオンの決意を悟ったスティレットもまた、シオンを支える為に決断した。

「・・・ならシオンさん。私もオペレーターとしてシオンさんを支えます。」
「な・・・ステラ！？」

スティレットの決意の表情に、シオンは戸惑いを隠せない。
ヴィクターによって施された洗脳が制御不能になり暴走し、自らの意思に反して多くの帝国兵をその手で殺してしまったスティレットは、武器を手にする事に恐怖心を抱くようになってしまい、もう二度と戦う事が出来なくなってしまった。
それを知っているからこそ、シオンは不安そうな表情になったのだが。

「大丈夫なのか！？だって今の君は・・・！！」
「今の私でもオペレーターなら出来ます。それは先日の内乱騒ぎの時に実証済みです。オペレーターとしてなら充分にシオンさんの役に立てる、決して足手まといになんかならないと。」
「・・・ステラ・・・。」
「私もシオンさんや皆に守られるだけじゃ嫌だから。少しでもシオンさんの事を支えたいから。だから・・・！！」

今にも泣きそうな表情のスティレットを安心させる為に、マテリアがとても穏やかな表情でスティレットの肩を抱き寄せた。
そのマテリアの柔らかい体の感触と温もり、そして優しさが、スティレットの心を安心させる。

「私もサブオペレーターとしてステラちゃんをサポートします。ですからシオンさんは何も気にする事無く、思う存分暴れてきて下さい。」
「マテリア・・・。」
「シオンさん、忘れないで。貴方の帰るべき場所はここだという事を・・・必ず私たちの所に帰ってきて下さいね。」

戸惑いを隠せないシオンだったのだが、それでもスティレットとマテリアに力強く頷いた。
確かにこの2人がオペレーターをやってくれるなら、これ程心強い事は無い。これで思う存分戦いに集中する事が出来る。

「・・・分かった。頼んだぞ、ステラ。マテリア。」
「「はい！！」」

シオンに対してスティレットとマテリアが、力強い笑顔で敬礼したのだった。

6. 再び戦場へ

「スティレット・ダガー最終調整完了！！全機、全システムオールグリーン！！」
「よっしゃあ！！待たせたなお前ら！！スティレットが使っていたフレームアームをベースにして作り上げた発展量産型・・・その名もスティレット・ダガーだ！！さあ早くこいつを身に纏って出撃して来い！！おら早く行け！！とっとと行け！！」

先程まで大人しく待ってろとアリューシャたちに苦言を呈していたジャクソンだったのだが、今度は一転してアリューシャたちを急かし始めたのだった。

「量産機ではあるが基本性能は、スティレットが使ってたオリジナルの機体よりも上だ！！あのゼルフィカールとかいう帝国の新型とも充分に渡り合える程にな！！そしてこいつの最大の特徴は、マナエネルギーを動力源にした事で無限稼働を実現して・・・」
「お爺ちゃん分かったから、今から私たち着替えるから、早く部屋を出てってよぉ！！」
「何ぃ！？お前らガキ共の貧乳なんて今更見せられても、俺ぁちっとも嬉しくなんか痛い！！痛い痛い痛い（泣）！！」

アリューシャに尻を蹴飛ばされたジャクソンが、男性スタッフたちと共に部屋を追い出された。
そんな微笑ましい光景の最中、ヴァルファーレを装備したシオンはリニアカタパルトで待機しなが

ら、ヴァルファーレのOSを起動しスペックを確認していたのだが・・・エミリアが究極最強のフレームアームだと豪語するだけあって、これはまさに『化け物』だと言わんばかりの凄まじい代物だ。
　高機動、高火力を極限まで追求した弊害で、軍の誰もが機体性能に振り回され、まともに扱えない非常にピーキーな代物になってしまったとの事だが、それを差し引いても基本スペックは軽く見積もっても、シオンが使っていたパワードスーツの実に7倍以上だ。

　それに最大の特徴は従来のパワードスーツやフレームアームのようなバッテリー方式ではなく、コーネリア共和国が独自運用しているマナエネルギーを動力源にしているという点だ。
　マナエネルギー・・・それはこの世界の大気中に大量に溢れ返っている自然魔法エネルギーであり、自然を汚さないエコクリーンなエネルギーだとして世界中から注目を集めている。
　実用化に成功したのは世界中でコーネリア共和国だけであり、それ故に各国が血眼になってコーネリア共和国に、技術提供を強く要求している代物だ。

　動力源としてヴァルファーレに吸収されたマナエネルギーは、動力として使われた後に大気中に排出され、排出された残りカスが自然へと還り、再びマナエネルギーとして再構築される。
　つまり理論上はフレームアームを無限稼働させる事が可能になっており、ビーム兵器なら弾数を気にする事無く無尽蔵に使える事を意味するのだ。
　これだけのハイスペックな機体を、エネルギー残量を気にする事無く無限に使い続けられる・・・これはもうとんでもない代物だ。まさにコーネリア共和国の魔法化学技術を結集して作られた、究極最強のフレームアームだと言えるだろう。

『シオンさん。現在友軍がルクセリオ公国騎士団と連携し、ポイントCO36にてグランザム帝国軍と交戦中です。シオンさんには敵軍の排除、可能であれば旗艦の撃墜をお願いします。』

　シオンの目の前にある巨大モニターに、軍服を着たスティレットからの通信が送られてきたのだが・・・隣に座っていた女性士官がスティレットを怒鳴り散らしたのだった。

『リーズヴェルト中尉！！貴様は大尉殿の恋人らしいが、その軍服を身に着けている間はアルザード大尉と呼べ！！何がシオンさんだ！？公私混同するな愚か者がぁっ！！』
「いいんだよ別にそんな細かい事はどうでも。」
『しかし大尉殿、それでは・・・！！』
「今更ステラに大尉だなんて他人行儀で呼ばれたくないしね。軍人としては失格かもしれないけど、それでも今まで通りに接してくれた方が僕としては安心出来るんだ。」

　もう何度も繰り返しになるが、ヴィクターが施した洗脳の影響で今のスティレットは、精神的にとても不安定な状態にある。
　だからこそ隣の女性士官に突然怒鳴り散らされて、スティレットの心が乱れてしまう事をシオンは不安視していたのだが・・・それでもスティレットはシオンに対して気丈な笑顔を崩さなかった。
　今まで通り接してくれた方が安心出来る・・・そのシオンの言葉があったからなのか。
　シオンもスティレットも、これでは軍人としては失格なのかもしれないが。

『リニアカタパルト・エンゲージ。ヴァルファーレ全システムオールグリーン。射出タイミングをシオンさんに譲渡します。』

　スティレットからのナビゲートと共にリニアカタパルトが起動。シオンの身体が宙に浮く。
　そして決意の表情のシオンを、スティレットが力強い笑顔で送り出したのだった。

『進路クリア！！シオンさん発進、どうぞ！！』
「シオン・アルザード、ヴァルファーレ、出る！！」

スティレットとマテリアに見守られながら、シオンは遂に再び戦場へと飛翔した。
そして黄金の翼から緑色の光を放ちながら、物凄い速度でアーキテクトたちを援護しに行く。
懐からマナ・ハイパービームライフルを取り出し、スティレットから座標の指示を受けながら、背後から迅雷を狙おうとした帝国兵を迎撃。
放たれた超威力のエネルギー弾が、帝国兵の左胸をパワードスーツごと易々と貫いたのだった。
何が起こったのかさえ理解出来ないまま即死した帝国兵が、驚愕の表情で力無く地上へと落下していく。

「あれはまさか・・・シオン・アルザード！？」
「黄金のフレームアームだと！？コーネリア共和国軍の新型か！？」

驚きを隠せない帝国兵たちは慌ててシオンを迎撃しようとするが、それでもヴァルファーレを纏ったシオンのあまりの機動性と速度の前に、ロックオンすらままならない。
そして戸惑う帝国兵たちを、マナ・ハイパービームサーベルで次々と斬り捨てていく。
銃弾さえも弾き返す強固さを誇るパワードスーツでさえも、まるでハサミで紙を切るかのように、シオンは易々と斬り裂いていった。

「ナイス、シオン！！やるじゃん！！」
「お姉ちゃん、変態がいる！！私たちの目の前に変態がいるよ！！」

シオンの凄まじい活躍ぶりに、背中合わせの状態になった轟雷と迅雷が、希望に満ち溢れた笑顔を見せたのだった。
高機動、高火力を極限まで追求した結果、あまりにもピーキーな代物になってしまい、コーネリア共和国軍の誰もがまともに操れなくなってしまった、究極最強のフレームアーム・ヴァルファーレ・・・それをシオンはまるで自分の手足のように完璧に使いこなしていた。
機体性能に振り回されるどころか、逆に秘められた機体性能を最大限に引き出し、戦場を蹂躙し、帝国兵たちの命を次々と奪っていく。
完全に人間離れしたシオンの強さ、そしてヴァルファーレの圧倒的な性能の前に友軍が次々と撃墜され、帝国兵たちは焦りを隠せないでいた。

「隊長、奴の動きが速過ぎて捕らえ切れません！！あんなの人間の動きじゃありませんよ！！」
「ええい、狼狽えるな！！キラービーグで一斉に取り囲めぇっ！！」

3機ものモビルアーマーをものの数秒で大破させたシオンを、マチルダたちが撃ち漏らした60体近くもの無人小型戦闘機のキラービーグが一斉に取り囲む。
逃げ道を塞ぐ事で、極限まで磨き上げられたヴァルファーレの機動性を封じるのが狙いなのだろうが、それでもシオンは全く動じない。
60機ものキラービーグを、全てまとめて一度にロックオン。

「大空を舞い上がれ！！フェザーファンネル！！」

緑色の光を放つ黄金の翼から放たれた、12基ものフェザーファンネルが飛翔し、物凄い勢いで緑色のエネルギー弾による全方位オールレンジ攻撃を仕掛ける。
60機ものキラービーグが、あっという間に全機撃墜されてしまった。

「何いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ！？」
「はあああああああああああああああああああああ！？」
「何だ今のは！？一体何が起きたというのだぁっ！？」

驚愕の表情の帝国兵たちに、マナ・ハイパービームライフルの銃口を向けるシオンだったのだが。

「待ってくれ！！分かった、降伏する！！とても俺ら如きじゃ敵わねえよ！！」

生き残った帝国兵たちは慌てて両手を上げて、シオンに対して降伏の意思を示したのだった。
目の前で有り得ない光景を次々と見せつけられて、帝国兵たちは悟ったのだ。
シオンの圧倒的な強さ、そしてヴァルファーレの圧倒的な性能を。
どうあがいても自分たちでは、そして鹵獲したパワードスーツ如きでは太刀打ち出来ないと。立ち向かった所で無駄に殺されるだけだと。
シオンも降伏した帝国兵たちまで殺すような真似はせず、そんな彼らをアーキテクトたちが次々と拘束していく。

そしてアーキテクトたちを無事に救助したシオンはスティレットの指示を受けながら、帝国軍の輸送艦へと突撃していった。
襲い掛かるモビルアーマーをマナ・ハイパービームサーベルで切り裂き、戦闘機をフェザーファンネルで撃墜し、帝国兵たちをマナ・ハイパービームライフルで撃ち落としていく。
その凄まじいシオンの戦いぶりをグランザム帝国軍の指揮官が、輸送艦の旗艦から驚愕の表情で見つめていた。

「・・・全滅・・・！？あれだけの数の部隊が、奴1人の手によって全滅させられただと・・・！？有り得ん・・・こんな・・・こんな馬鹿げた事が・・・っ！！」
「シオン・アルザード、本艦に急速接近！！」
「全砲門開け！！撃ち殺せぇっ！！」

3機の輸送艦が一斉にシオンに弾幕を浴びせるが、それでもシオンはマナ・ハイパービームシールドで易々と弾幕を防ぎ、再び12基ものフェザーファンネルを展開させる。

「当たれえええええええええええええええええええっ！！」

そしてシオンの脳波とヴァルファーレのOSによって制御されたフェザーファンネルが、一斉に輸送艦へと飛翔。
凄まじい勢いで全方位オールレンジ攻撃を行い、弾幕を放つ無数の砲台を次々と撃墜し、ものの10秒足らずで輸送艦を戦闘不能状態へと追い込んでしまったのだった。

「全艦、全砲門撃墜！！味方部隊も壊滅、これ以上の戦闘継続は不可能です！！」
「シオン・アルザード、なおも本艦に急速接近！！もう目の前にまで迫って・・・うわあっ！！」
「大佐ぁっ！！このままではぁっ！！」

指令室に向かってマナ・ハイパービームライフルの銃口を向けるシオンの姿に、さすがの指揮官も部下たちの命を守る為に決断せざるを得なくなってしまった。
輸送艦から白旗を出すよう部下に命令し、シオンに通信を送る。

『・・・我々は貴国に対する一切の侵略行為を中止し、無条件降伏する。だから生き残った兵たちの命と尊厳だけは保障してくれないか？』
「当たり前だよ。捕虜は丁重に扱う。僕たちはシュナイダーと違って非道じゃないからね。それだけは約束するよ。」
『貴官の善意と騎士道精神に感謝する。シオン・アルザード。』

白旗を掲げる3機の輸送艦が、シオンの指示で地上へと着陸する。
たった1人で戦況をひっくり返し、あれだけの数のグランザム帝国軍を壊滅させたシオンの姿を、マチルダたちが唖然とした表情で見つめていたのだった。

7. 交錯する愛憎

『テレビの前の皆さん、ご覧になりましたでしょうか！？あの英雄シオン・アルザード中尉がコーネリア共和国軍の新型フレームアームを身に纏い、圧倒的な強さでグランザム帝国軍を叩きのめしてしまいました！！』

テレビカメラの前で世界中の戦場カメラマンたちが、戦闘が終わったコーネリア共和国の城下町前で、白熱した報道を全世界に向けて流していた。
そしてシオンのあまりの強さ、そしてヴァルファーレの圧倒的な性能をまざまざと見せつけられた事で、瞬く間に世界中で大騒ぎになってしまう。
無理も無い。あれだけの数のグランザム帝国軍をたった1人で、しかも5分も掛からずに壊滅させ、降伏にまで追い込んでしまったのだから。

そしてこのシオンの活躍ぶりは、同時にコーネリア共和国が独占している魔法化学技術を、血眼になって手に入れようとしている他の国々を牽制する意味合いをも含まれているのだ。
仮にコーネリア共和国に無闇に戦争を仕掛けたとしても、グランザム帝国軍のように無様な敗戦を喫するだけなのだと。
これだけのシオンとヴァルファーレの圧倒的な力を見せつけられたのだ。これまでコーネリア共和国に強い圧力をかけ続けてきた他の国々も、これからは逆に慎重な対応を取らざるを得なくなってしまう事だろう。

『たった今、シオン・アルザード中尉が地上に降りてきました！！そして生き残ったグランザム帝国軍の兵士たちがアーキテクト・オラトリオ大尉の指示で、コーネリア共和国軍の護送車へと次々と連行されていきます！！我々は今からシオン・アルザード中尉にインタビューを・・・！！』

その自国の敗残兵たちの無様な光景を、シュナイダーがとても悔しそうな表情で睨み付けていたのだった。
対照的にカリンは冷静沈着に、シオンが世界中の戦場カメラマンたちからインタビューを受けている光景を見つめている。

「シオン・アルザード・・・さすがは英雄と呼ばれているだけの事はあるわね。」
「随分と冷静ですねカリン君。次からは君たちに彼と戦って貰う事になるのですよ？」
「・・・貴方、これだけ無様にシオン・アルザードに叩きのめされたのに、まだコーネリア共和国を侵略するつもりなの？」
「当たり前ですよ。魔法化学技術は我々が何としても手に入れる・・・あれだけの技術をコーネリア

共和国だけが独占するなんて、そんなのずるいじゃないですか。」

　その魔法化学技術を結集して作られた新型フレームアームのヴァルファーレの圧倒的な性能を、目の前でここまで見せつけられてしまったのだ。
　今回の無様な敗戦はシュナイダーに、以前から強く抱いていたコーネリア共和国の魔法化学技術への執着を、逆にさらに増大させる結果になってしまったようだ。
　シオンが見せつけた、ヴァルファーレのあまりの圧倒的な強さ故に・・・これはもう皮肉だとしか言いようがない。

「カリン君。まさか君はシオン君の活躍ぶりに、怖気づいてしまったのでは無いでしょうね？」
「まさか。誰が相手だろうと私は負けはしないわ。例えシオン・アルザードが相手だろうとね。」
「ならせいぜい期待させて貰いますよ。君たちゼルフィカール部隊の活躍ぶりをね。」

　そう、誰が相手だろうと負けるつもりはない。例えシオンが相手だろうとも絶対にだ。
　いや、カリンは負ける訳にはいかないのだ。父親が勝手に押し付けた借金をシュナイダーに肩代わりして貰う為に。
　仮にシオンに無様な敗北を喫しようものなら、カリンはシュナイダーにあっけなく切り捨てられるかもしれない。そうなれば残された借金を誰が払ってくれると言うのか。
　だからどんなに卑劣な手を使ってでも、例えこの手を血で染めようとも、シュナイダーが求める結果を出し続けなければならない・・・その強い危機感が、凄まじいまでのハングリー精神が、カリンの強さを支えていると言っても過言では無いのだ。
　戦場カメラマンからのインタビューに受け答えするシオンの姿を、カリンは決意に満ちた瞳で見つめていたのだった。

「シオン隊長！！」

　そこへマチルダたちが、慌ててシオンの下にやってきた。
　かつての上官との、久しぶりの再会・・・だが今のシオンのコーネリア共和国軍大尉という身分が、マチルダたちと必要以上に親しく接する事を許してはくれなかった。
　コーネリア共和国は中立国だ。その中立国のコーネリア共和国軍に加わるという事は、グランザム帝国軍だけではなくルクセリオ公国騎士団とも、本来なら敵同士とまでは行かないものの、必要以上に協力関係を築いてはいけない事を意味するのだ。

　今回はジークハルトとミハルを人質に取られ、シュナイダーに戦闘行為を強要されていたという人道的な理由から、シオンたちは自国の領地内で戦闘するマチルダたちを「仕方無く」援護したのだが・・・それも中立国である以上は本来ならば決して許されない事なのだ。
　本来ならばシオンたちは明らかな侵略の意思を示したグランザム帝国軍だけでなく、止むを得ない事情があったとはいえ領地侵犯を犯したルクセリオ公国騎士団でさえも、中立国としての立場から攻撃対象にしなければならなかったのだ。

　このコーネリア共和国の今回の対応も、近い内に世界中で激しい議論が沸き起こる事になるのは間違いないだろう。絶対中立を表明しながら、何故ルクセリオ公国騎士団を援護したのかと。
　マチルダたちもそれを分かっているからこそ、シオンに対してどう声を掛ければいいのか分からなくなってしまい、複雑な表情を隠せずにいたのだが・・・。

『シオン隊長！！その新型フレームアームを鹵獲して、我々の元に戻ってくる事は出来ないのですか！？』

ただ1人ナナミだけは臆する事無く、ビスマルクの指令室からシオンに通信を送ってきた。
そのナナミの大胆な行動と発言に、マチルダたちは唖然とした表情を見せる。

「ナナミ！？」
『ねえ、シオン隊長！！どうしてリーズヴェルト少尉なんですか！？どうして私じゃ駄目なんですか！？どうして私ではなくリーズヴェルト少尉を選んだのですか！？』
「ナナミ、君は一体何を言って・・・！？」
『私はこんなにもシオン隊長の事を愛しているのにぃっ！！』

突然のナナミの爆弾発言に、戦場カメラマンたちが一斉に、唖然とするシオンにカメラのフラッシュを浴びせたのだった。
と言うかナナミは、戦場カメラマンがシオンの事を世界中で生中継している最中だという事を、自分の発言が世界中に流れてしまっているという事も、完全に忘れてしまっているようだった。
アーキテクトもマテリアに言っていたが、人は1つの事に夢中になってしまうと、他の事に目が回らなくなってしまう物なのだ。
だが次の瞬間ナナミはマチルダに対して、もっととんでもない爆弾発言をしたのだった。

『ほらマチルダ伍長！！上官の私が告白したのだから、貴方もシオン隊長に告白しなさい！！これは上官としての命令よ！！』
「えええ！？ナナミ曹長、いきなり何言ってるんですか！？」
『貴方の気持ちに私が気付いていないとでも本気で思っていたのかしら！？貴方もシオン隊長の事が好きなのでしょう！？そんなの見ていれば分かるわよ！！』
「・・・いや、あの・・・でも・・・。」
『いいから早くしなさい！！このままだとシオン隊長と話す機会が二度と無くなるかもしれないのよ！？自分の気持ちを抑え込んだまま、このまま何もせずに一生後悔し続けるつもりなの！？』
「・・・っ！？」

確かにナナミの言う通りだ。シオンがコーネリア共和国軍の大尉という身分である以上、このままだと下手をしたら二度とシオンに会う事が出来なくなってしまうかもしれないのだ。
コーネリア共和国は中立国であり、ルクセリオ公国と友好関係を築いている訳ではないのだから。そのコーネリア共和国にシオンが亡命したという事は、つまりはそういう事なのだ。
もうこうなったら、どうにでもなれと・・・マチルダは腹をくくったのだった。

『ほらマチルダ伍長、早く！！』
「あ、あの・・・私もシオン隊長の事が好きですっ！！」
「えええええええええええええええええ！？」

思い切り顔を赤らめながら、とても恥ずかしそうにしながらも、マチルダはシオンに愛の告白をしたのだった。
まさかの連続しての愛の告白に戸惑うシオンに、戦場カメラマンたちが容赦なくカメラのフラッシュを浴びせる。

「何だこのギャルゲーみたいな展開は。シオンめ爆発しろ。」

アーキテクトがそんなシオンの事を、遠くから苦笑いしながら見つめていたのだが。
その時マチルダのパワードスーツ・ツヴァイから、ロックオンされた事を示す警告音が響いた。

慌ててビームシールドを展開してシオンから間合いを離すマチルダたちだったのだが、そんなマチルダたちの前にスティレット・ダガーを身に纏ったアイラ隊の少女たちが、シオンを庇うかのように情け容赦なく立ちはだかった。
戸惑いの表情で、マチルダたちはアイラらフレームアームズ・ガールたちを見つめている。

「あれはリーズヴェルト少尉が使ってたフレームアーム・・・！？それが10機も・・・！？まさか量産したって言うの！？」
「シオンはもうこの国に亡命したんだ。そしてステラと恋仲になった。賢明なアンタならこれ以上言わなくても、その意味が分かるだろう？アレン伍長。」
「アーテル中尉・・・そのフレームアームは・・・！？」
「スティレット・ダガー。アンタが今言った通り、ステラが使ってた機体の発展量産型さ。」

見た目はスティレットが使っていたフレームアームにそっくりだが、最大の違いは背中から生えている光の翼・・・そしてオリジナルの機体の青色ではなく、純白に塗装されているという点だ。
その背中から光の翼を生やす純白のフレームアームを身に纏ったアイラたちの姿は、まさにシオンを守る為に天から降臨した天使であるかのようだ。
そして戸惑いを隠せないマチルダの前に、さらにアリューシャが立ちはだかる。

「ああもう、アイラ隊長ってば言い方がいちいち回りくどいんですよ！！シオンさんをルクセリオ公国に連れ戻すつもりなら、私たちも一切合切容赦はしないって事だよ！！」
「だけど、私は・・・！！」
「これ以上ここにウダウダと居座り続けるつもりなら・・・この国の軍人として貴方たちと交戦しないといけなくなるんだけど？」

マナ・ビームサーベルをマチルダの首元に容赦なく突き付けるアリューシャの鋭い眼光は、自分たちが本気だという意思表示をマチルダに情け容赦なく示していた。
シオンは今ではこの国にとって無くてはならない存在だ。そのシオンを今更ルクセリオ公国に大人しく帰す訳にはいかないのだ。大体シオンがいなくなってしまったら、取り残されたスティレットは一体どうなるというのか。
それに今のマチルダたちは止むを得ない事情があったとはいえ、領地侵犯を犯している事に変わりは無い。本来ならばグランザム帝国軍からの命令に従う必要性が無くなった以上は、早急にここから出ていかなければならない身分なのだ。
アリューシャがマチルダたちに剣を向けているのは、つまりはそういう事なのだ。

『もうよい、アレン伍長。お前たちは早急に城下町へと帰還せよ。』
「な・・・陛下！？」

だがそこへ見かねたジークハルトが、マチルダに通信を送ってきたのだった。
ジークハルトの傍でミハルが泣きそうな表情で、モニター越しにマチルダを見つめている。

『その娘の言う通りだ。我々がこれ以上コーネリア共和国の領地内に居座る理由は無い。』
「ですが陛下・・・！！」
『コーネリア共和国が中立国だという事を忘れるな。お前たちがこれ以上そこに居座り続ければ重篤な国際問題になる。その娘がお前に剣を向けたのは当然の対応だろう。』
「・・・・・。」
『お前もキサラギ曹長もシオンの心を射止める事が出来なかった。それは逃れようのない事実だ。お前たちはリーズヴェルト少尉とのシオンの奪い合いに敗れたのだ。分かるな？』

情け容赦のない言葉を浴びせるジークハルトだが、下手に慰めの言葉を掛けても何の励ましにもならない事もジークハルトは理解していた。
だからこそジークハルトは、マチルダたちが失恋したという事実だけを伝えたのだ。
スティレットという恋人を得たシオンの事を、綺麗さっぱり諦めさせる為に。

『もう一度言う。お前たちは早急に城下町に戻れ。これは命令だ。これ以上他国との政治問題をややこしくするな。いいな？』
「・・・了解しました。陛下。」

渋々ながらもマチルダはモニター越しに、ジークハルトに敬礼したのだった。
確かにジークハルトの言う事も一理あるし、ルクセリオ公国の軍人である以上は国王であるジークハルトからの命令は絶対だ。軍人として逆らう訳にはいかなかった。
それに自分たちの私情のせいで、ルクセリオ公国という国全体の立場を危うくしてしまう訳にはいかないのだから。

「・・・その剣を収めて貰えないかしら？私たちは大人しく帰るから。」
「分かってくれればそれでいいんだよ。さあシオンさん、帰ろ帰ろ。」
「お、おいアリューシャ・・・。」
「マテリアちゃんにも言われたでしょ？シオンさんが今帰るべき場所はルクセリオ公国じゃない。私たちコーネリア共和国だよ。」

マナ・ビームサーベルを懐にしまったアリューシャは、問答無用でシオンの右手を引っ張って城下町へと飛翔する。
そのシオンの後姿をマチルダが、敬礼しながら泣きそうな表情で見つめていたのだが。
その様子をモニター越しに安堵の表情で見つめるスティレットの下に、突然ナナミからの通信が送られてきたのだった。

『・・・リーズヴェルト少尉・・・いえ、その軍服のエンブレムは中尉かしら・・・貴方のせいでシオン隊長は・・・！！』
「・・・キサラギ曹長・・・。」

怒りと憎しみに満ちた表情で、ナナミはスティレットを睨み付けたのだが、それでもスティレットもまた怯まずにナナミを見据えたのだった。

「私もシオンさんの事は譲れません。だって私もシオンさんの事が好きだから。」
『貴方だけは・・・絶対に許さないから・・・！！』

ナナミが通信を切った後も、スティレットは気丈な態度でモニターを見つめ続ける。
そんなスティレットをマテリアが悲しそうな表情で、背後からそっ・・・と優しく抱き締めたのだった。